



# 〈書評〉酒井一夫著 『インフレーションと管理通貨制』

則武, 保夫

---

(Citation)

国民経済雑誌, 141(3):130-132

(Issue Date)

1980-03

(Resource Type)

departmental bulletin paper

(Version)

Version of Record

(JaLCD0I)

<https://doi.org/10.24546/00172483>

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/00172483>



# 酒井一夫「インフレーションと管理通貨制」

則 武 保 夫

本書の題名である「インフレーションと管理通貨制」は、酒井一夫教授が長いあいだ関心をもちつづけてこられた2つの問題である。この2つの問題の関係について、教授は次のように述べられている。「インフレーションと管理通貨制とは、現代資本主義において深く結びついている。たがいに他を因とし果とする関係にある。もちろん両者は理論的には別個の問題であり、固有の研究領域を形成して然るべきであろう。けれどもインフレーションは貨幣価値にかんする問題であり、管理通貨制は通貨の数量にかんする問題である。そして通貨の価値と数量とは相互規定的な関係にあるから、ここにインフレーションと管理通貨を統一する視角がある。貨幣価値と通貨数量との関係は、本書を通じて主要なモチーフとなっている」(序文)。

本書は2篇からなり、前篇は「インフレーションの基礎」、後篇は「管理通貨の構造」である。前篇には第1章から第4章まで、後篇には第5章から第8章まであてられている。以下、順をおって見てゆくことにしよう。

第1章は、「計算貨幣と通貨」である。この章においては、貨幣単位の価値がどのようにしてきまり、また変動するかを追求している。そのためには計算貨幣としての金と通貨(流通手段)としての金を区別することが重要で、インフレーションは計算貨幣の機能における変動であることを論じている。

現在の世界は、不換紙幣の流通下にあるが、それについては、「金本位制におけるような明確な価格標準は存しないけれども、それが事実的にせよ、あるいは法制的にせよ、価格標準はつねに機能している。なるほど金の公定価格は設定されないが、金の市場価格が事実上の価格標準を表示している(地金需要による変動を捨象して)。そしてこの事実上の金の価格標準に基づいて商品価格は決定されている。金の計算貨幣機能は紙幣流通下にあっても貫徹しているのであって、貨幣単位は金の一定分量を意味する以外のものではないのである」とされている。

また、銀行券が金または金為替への交換性を失うようになれば、「不換国家紙幣の諸法則に従う」ようになる。さらに、実質的な物価変動と名目的な物価変動を区別し、名目的物価変動は、インフレーションを理解するうえに決定的重要性を持つばかりでなく、またそれは国家の政策により惹起されることが銘記されるべきである、としている。

第2章は、「金の価値・価格と物価変動」である。この章は、前章をうけて、金の価格変動と金の価値変動とが惹起する、名目的物価変動と実質的物価変動の相違を、教授は諸論争の検討を通じて明らかにされている。

金の価格引上げと物価については、シャルル・リストとアンリ・ドンの見解を、金の価値変動と物価については、1910年ごろの世界的な物価変動をめぐるノイエツァイト誌上で有名な論争が批判的に検討されている。また、岡橋教授の金の「相対的価値」も検討されている。

第3章の「貨幣数量説」の吟味では、フィッシャ、マーシャル、アフタリオンなどの貨幣数量説を比判することによって、前2章で積極的に主張されたことを確認しようとしている。貨幣数量説に対して、貨幣の価値と貨幣の購買力との混同、諸通貨の流通法則の相違の無視などの難点が指摘されている。

第4章の「インフレ・デフレの非対称性」では、リストのデフレ論とインフレ・デフレの非対称性、岡橋教授のデフレ論が検討されている。インフレーションが通貨増発→物価騰貴の過程であるのに、デフレーションはかえって物価下落→通貨縮小の過程であるという非対称性の問題は、インフレの基本規定である「紙幣流通の独自の法則」の正しい理解にかかわる問題であると、教授はいわれている。

通貨の増発はインフレーションを導くのに、通貨の収縮はデフレーションを導かず、通貨の増加と減少とが異なった性質の物価騰落を起こす。岡橋教授は、通貨の縮小は流通必要量からの引揚げだから実質的物価下落を惹起するとされるが、酒井教授によれば、流通必要量への追加が名目的物価騰貴を起こし、流通必要量からの引揚げが実質的物価下落を起こすのはなぜかということは、不明である。酒井教授の見解は、通貨の増減そのものの中にある非対称の指摘である。

後編の「管理通貨制の構造」は、現代管理通貨制の機構と運用を明らかにしようとするものである。普通、管理通貨制は金本位と対比されるけれども、教授は金為替本位制との対比で管理通貨制をとらえようとする。教授によれば、「管理通貨制は独占段階の通貨制度であるが、金為替本位制もまた独占段階の金本位制である。金為替本位制は金信用に立脚する制度であるが、金および金為替の国家管理が行なわれており、金・金為替の兌換と輸出入の形態は19世紀のそれとは異なっている。これに対して、管理通貨制は銀行信用の流通量を管理することを主眼とするが、それからくる信用および現金（不換銀行券）の流通量の増減は通貨の価値に影響せずにはいない。しかし固定平価制のもとでは、通貨価値の変動に制限があるから、通貨管理そのものが限定を受けざるをえない。これは、通貨の価値と数量との背反関係が、通貨制度の上に顕現したものである」とされている。

第 5 章は、「金本位制の崩壊と管理通貨制への移行」である。この章では、金本位制崩壊の歴史的過程が扱われている。

第 6 章の「管理通貨論と所得説」では、アフタリオンの所得説に立脚する管理通貨論がとり上げられ、貨幣数量説に立脚するケインズの管理通貨論とが対比されて、検討されている。

第 7 章の「金為替本位制と管理通貨制」においては、1971年の金・ドル交換停止までのブレトン・ウッズ体制のもとにおける管理通貨制の機構とその運用が論じられている。

第 8 章の「管理通貨制のもとでの流通法則」においては、管理通貨制のもとでのインフレーションの進行が主題とされているが、とくにブレトン・ウッズ体制の崩壊した後、変動為替相場制のもとで考察されている。

本書の特色として、教授は、第 1 に貨幣現象や通貨制度を、貨幣金を基礎として理解しようと努めたこと、第 2 にインフレーションも管理通貨制もほんらい国家政策に属するものであるが、そうした政策が独占段階では経済過程や制度に定着していること、第 3 に諸通貨の流通法則を差別せねばならず、不換制においてもいちがいに紙幣流通か信用流通かというのではなく、混合流通として、とらえねばならないこと、第 4 に当面の議論の論点について、できるだけその源泉に遡って説明しようとしたことなどをあげていられる。

IMF 体制が崩壊した後は、管理変動相場制のもとで、国際的にいわゆるスタグフレーションが進行し、金の公定価格は廃止され、金価格は急騰している。また、理論の分野では新貨幣数量説が復活してきた。今こそ、貨幣理論がためされる時である。このような時に、本書の出版はまことに時宜をえたものといえよう。現代の通貨制度やインフレーションを基礎理論から研究するためには、必読の書といってもけっして過言ではあるまい。

(北海道大学図書刊行会、1977年5月)